

4 道県知事トップセミナー

寺田典城秋田県知事 講演会

日時：平成17年1月18日（火）

場所：岩手県庁

○司会

寺田秋田県知事様によりますりレートップセミナーを開催いたします。
竹内副知事から寺田知事様のご紹介をお願いします。

○竹内副知事

北海道、北東北4道県知事によるりレートップセミナーの開催に当たりまして、ごあいさつと、それから今日、講師としてお越しいただいた寺田知事様のご紹介を申し上げます。

今日は、寺田知事様、本当にお忙しい中、岩手県までお運びいただきまして、職員一同心から感謝を申し上げる次第でございます。このセミナーは、平成14年の第6回北海道・北東北知事サミットにおいて合意されたもので、北海道及び北東北3県の連携機運の一層の醸成を図るため、4道県の各知事が他の道県に出向きまして、職員等に対して講演を行っているものでございます。去年の2月には本県の増田知事が秋田県で講演を行いまして、そして今日は寺田秋田県知事さんをお迎えして開催することとなった次第でございます。こうした4道県の知事が相互に他の道県の職員に対して講演することは、これは全国でも例がない取り組みになっておりまして、北海道・北東北知事サミットの成果の一つでもあります。

寺田知事様は、簡単にご紹介申し上げますけれども、民間会社の社長を歴任されまして、平成3年から横手市長を6年務められた後、平成9年4月に秋田県知事に当選され、以来全国知事会においても農林商工調査委員会委員長や市町村財源問題研究会座長などを務められておられます。民間出身の知事さんとして、昨今強く求められている経営感覚を行政に取り入れまして、行政コストの縮減、サービスの向上などに大変厳しく取り組んでいるというふうに伺っております。今日は、「新しい時代の行政」をテーマにご講演いただくことになっており、誠に意義深いものというふうに考えております。今日この会場に集まっていたいただいた皆様の他に、今日のご講演は全部テレビで各振興局、それから庁内にも流しております。ほとんど全職員が聞けるという体制になっておりますので、ぜひ皆様もこれを、今日のご講演を糧にまた一層頑張っていただけるようお願いをしたいというふうに思っております。

秋田と岩手はともに奥羽山脈をいただきまして、水源を一つにする大変深いつながりを持った地域であります。これからのいろいろな取り組みを通じて、両地域の交流と連携がさらに深まるものというふうに思っております。このセミナーが今後の両地域のさらなる連携に向けて実り多いものになるようにお祈りを申し上げ、歓迎のあいさつとさせていただきます。本日はありがとうございます。

○司会

それでは、早速でございます。寺田知事様、よろしく願いいたします。

講演

○寺田秋田県知事

はじめに

どうも済みません。私は政治家をやっているながら、こういう場所でお話することが最も嫌いな男なのです。政治家をしている以上、それでは通らないのですけどね。この間どこかの新聞社に東北6県の知事の採点表みたいなものが出ておりましたね。(注:平成16年12月25日付け朝日新聞(東北版)記事)おたくの増田さんの方はみんなほとんどいい点数で出ていました。そうでしょう。私は、実行力や情報公開度だとかについては増田さんと同じぐらいの評価をいただいていたのですが、説明能力については私が一番悪い点でした。確かにそのとおりなのです。私の経歴は、役人もやったことがないし、「婿と社長と市長しかやったことがない」とよく言っています。社長というのは、「あれ、あれ。」と言っていれば終わってしまうものなのです。ところが、行政というのは手続きや説明責任が求められますよね。そんな私が皆さんの前で1時間も話をするというのは気が進まなくて、北東北3県プラス北海道の知事サミットのこの部分だけはやめてしまった方がいいな、なんて思ったりもしています。

増田知事は今、三位一体改革などで全国的にご活躍なさってますね。説明もしっかりなさるし、知事としても先輩ですし、私はいつも尊敬させていただいています。今日は、私みたいな欠けた人間がどういうふうな行政をやっているかという話を少しさせていただきたいと思います。

新しい時代の行政とは

例えばあるテレビ番組での増田さんとの対談のとき、司会者から「増田知事さんの机の上には何の写真が乗っていますか。」という質問がありました。「愛するうちの家内の写真だ。」というお答えで、そのとき見たら間違いなくありました。きっちり。次に私に聞かれたのです。「寺田知事の場合は何が乗っているのか。」と。「うちの机の上には『なまはげ』が乗っている。」と、こう答えました。(場内笑) そうしたらその話をたまたま女房が自動車運転中に聞いておまして、「あんたすごいこと言うなあ。」なんて言われました。(場内大笑)

けれども面白いもので、夫婦だって、役所だって、変な人とも大体10年、20年つき合っていると、それに慣れ親しんでくるものです。だから、秋田県は秋田県庁流の、岩手県は岩手県庁流のやり方がいろいろあるでしょうし、それで良いと思います。ただ、私の言いたいのは、「時代はいつも新しい価値を求めている」ので、それに対して行政がどうやってついていけるか、そのニーズをどうやって掘り起こせるか、そんなことが大切になるのではないのかなと率直にそう思います。ですから、三位一体改革も、地方分権や市町村合併が進んでいますから、県庁のあり方や、新しい時代の行政のあり方、県庁とは何ぞやということ、そんなことを原点から考えていかなければならない時に来ているのではないかなと思います。

(上着を脱いで、椅子に掛けつつ、) 申し訳ないですけども、(岩手県の) 知事室のペレットストーブの側にあまり長くおりましたから暑くて。カラマツのペレットですかね、あれは。

さて、続きですが、今日はそういうことをお話しさせていただきたいと思います。私も知事を

始めて今年で8年近くなるのですけれども、今ようやくそういう境地に行き着いたというか、そういう気になったというか、そういう行動・思考で行こうという気になりました。つまり、県行政というのは結論を申せば「市町村行政にとってのサポーター」であるし、それから岩手県で言えば岩手県民のいろんな人達に対するサポーターであると考えます。私は秋田県民に対するサポーター、それこそ一番強力なサポーターになろうと。市町村行政自立のためのサポーターになろうということです。その辺がこの頃わだかまりなくお話しできる気持ちになってきています。

今日お話しさせていただく演題は、「新しい時代の行政を！」ということなのですが、まず一つは「県は市町村のサポーター」という大きな前提で、そうであれば県庁が生き残っていくために何をなすべきか、ということをお話します。それからもう一つは、時代というのはいつも新しい価値を求めていますから、それに対して県庁はどうやって対応すればいいかということです。

捨てることから始めよう

私は、物事は捨てることから始まるのではないかと思うのです。いろいろな要らないことがあります。時代の価値に照らして必要でないものを捨てることから始まるのではないか。「形のあるものというのは必ず壊れる」と思いますので。民間企業は倒産しますが、あれは形があるからつぶれるので、行政だって今やつぶれる可能性があるのではないのでしょうか。日本の国だってここ4、5年すればそこまで行ってしまう可能性があるのではないですか。ガラガラポンになる可能性だってあるでしょう。私がこれ以上しゃべると生臭い話になってしまうので止めます。増田さんはそういった表現は非常にうまくやれるけれども、私は「今のやり方ではだめだ」と、厳しいしゃべり方をしてしまうし、気が向いたらその辺も話しをさせていただこうと思います。

現場主義。そして私の経験

もう一つ言いたいことは、私は現場主義だということです。だから、「行動なき祈りは冗談だ」とよく言うのですが、そういうものの考え方でよく話しをさせていただいています。人の考え方というのは、生活体験だとか人生経験だとか、そういうところから根本的なことが出てくると見ています。私の場合、秋田の田舎で生まれた地主の息子が、雪の中、自然の中で育っていますから、やっぱり自然についてすごく興味がありますね。そういったことはあるのではないのでしょうか。

先ほどお話ししたのですけれども、婿と社長と市長しかやったことがないという、全くそのとおりの経歴なのです。ここで婿になったことのある人は手を挙げて下さい。申し訳ないけれどもね。いないの？誰もいないのか？私だけなの？まあそれはいいです。女性の方はお嫁さんに行くということは、相手のしゅうとの家に入るということでした。いろいろといさかひもあったかも分からないけれどもね。もちろんいさかひはなかったかもしれないけれども。

私が婿になった先は地方の政治家で、保守合同時代の三木武吉の秘書なんかやって、県会議員になってやめた、全く政治志向のおやじでした。逆に私は全く政治嫌いの男でした。全くそうだったのです。昭和30年頃、三木武吉さんですから、鳩山（一郎）さんの方ですね。もう片方は吉田茂さんの方でした。保守合同が成ったとき、4、5年しかもたないよと言われていました。

だけど、昭和32、33年から、50年間近く今の政党が政権を取っている訳ですから、「まず4、5年」が今まで続いている訳ですね。私を生んでくれた両親と婿に入った先の両親では、やっぱり全然考え方が違う。世の中の違いはそんなところから覚えますね。だから婿になった方がいいのです。おたくの息子さん方もこれから婿になった方がいいですよ、という訳ではなくて、(場内笑) そういうのもいい経験ですよということです。

簡単に言うと、後はやることなく会社の社長でもやってきたというところですよ。四つか五つの仕事をやってきたのですけれども、コンサルみたいな会社や、建設みたいな会社、それから燃料関係とかいろいろやりました。社長というのは、会社が利益を出している限り、行政みたいにいろいろトップに話を上げたりすることはしないのです。アドバルーンを揚げたり、議会に諮る必要もないですし。私なんか50歳になるまで行政経験ゼロですから、市長になった時にはびっくりしました。議会や議員を通さなければ予算ひとつ、金1円すら使えないというのですから。「これは一体どういうことだ。」と聞いたことがあります。

コスト意識

さて、その時に何を発想の基点として臨んだかということ、やっぱり「コスト意識」です。私は、一納税者でしたから、税金を納める苦勞は大変いたしました。グループで100億円ぐらいの仕事をしておりまして、合わせて国税が2億円ぐらいと県税を2億円納めていました。税は発生主義ですから、金があるかないかに関わらず税金を払っていかなければならないのです。そうでしょう。税務課の方がここにいれば分かるのですけれども、とにかく払っていかなければならない。だから、その税金の使い方については、大変にコストを意識して見えています。

それから決算書を見るのが好きです。バランスシート。私の政治の、行政の原点というのは、市長になった時でもそうですが、やっぱり「効率的な行政」ということでした。そのことだけにポイントを絞って、コスト重視の行政を行うようにしました。ですから、建設関係でいいますと、県庁に入った時に事業費で100億円かかるかかると言っていた案件は80億円でできたし、国体なんか全部で500億円の設備投資をしようとしたところに言ってきましたが、結局400億円でできそうです。みんなこの方法でできると思いました。建設交通部長や総務部長なんかとたまにやり合って、「100億円のものを70億円でやろうや。」と言うと、「それでは窓が付きません。」とか、「ドアも付きません。」と、間違いなくこう言うのです。(場内笑) 絶対言うのだから、「じゃあ、要らないから。窓もドアも要らない建物でも建てろ。」と言いつつ返すわけですよ。(場内笑) こっちの方に権限はあるからね。最初の1年間はまだ本当に殺し合いになりそうなくらい激しくやりました。横手市役所に入った時もそういう経験をしています。

役所のシステム

役所というのは、年功序列でやっていけるところであることは事実です。これも悪いシステムだとは思いません。ゆとりを持ってしっかり人生を設計し、自分の技量を磨いていくことは悪いことではありません。システムとして非常に非効率だという話もありますが、私は日本人の人

間性から、システムとしては全部否定するべきものではないと思います。すぐ若手を抜てきする
ような今の経営や、アメリカみたいなああいうやり方が必ずしもいいのか、私は分かりません。
役所は役所としてのやり方があると思います。

私は横手市役所へ入ったとき、役所の方が失業保険に入っていないことにびっくりしました。
それから勤務内容が法定主義だとか、給料は人事院勧告で決めるなんてことは全然知らなかった
のです。「あいつは仕事ができるから、給料上げてやれ。」なんて言ったら、「そんなことできるも
のではない。」なんて言われました。市長時代はそういうこともいろいろ経験してきました。

市長から見た県庁

その市長時代に見せていただいたのは県庁です。県庁というのは偉いわな。県庁の課長職を市
長は超えられない。県庁課長職と市長がやり合ったら、課長職に市長が負けます。それぐらい県
庁というのは偉い。あなた方は感じていないだろうし、今はどうなっているのか知らないけれど
も、すごくあなた方の権限というのは大きい。その当時から市としては幼保一体をやりたいとか、
農業はこういうことをしたいとか、許可を下ろしてくれとか、いろいろとやっても、みんな全然
ダメ。あの当時は係長だって「あっち向いてホイ。」っていう感じの雰囲気でした。(場内笑)あ
なた方だって経験しているでしょう。今から10年ぐらい前はそんなものではなかったかな。下
から上を見るとそういうことは一番よく分かります。そうでしょう。

こちらでは地方振興局と言うようですが、うちの県は地域振興局といいます。県の地方支分局
ですね。うちの県はここに権限も持たせていますが、いわばそういう地方の殿様でも、本庁の課
長でも、やっぱり偉かったのです。この経験があったおかげで、先ほど言った「県は市町村のサ
ポーターである」という境地まで行き着いています。主役は県ではなく市町村。市町村が発展す
るためには県が何でもいいから吸い上げて市町村のサポーターになることが大切だということ
です。ただし、何でも手とり足取りの「支援」ではなくて、サッカーでいうところのサポーターの
イメージです。市町村が自立して力がつけば、県政だって力がつき、県の全体的な力がつきます。
私はそういうところに行き着いています。私はそこなのです。

市役所の職員数

だから、私は横手市役所に入ったその時からすぐ人員カットを始めました。当時職員は400
人いました。私が市長を6年間務めた時は、勸奨退職もやりました。平成3年ですから、まだ勸
奨も……何か古いやり方だけれども、少しぐらいやれる時だったのです。私は平成3年採用です。
役所歴は。(聴衆の一人を指差して、)あなたは何年採用なのですか？前に座っている一番若い人。
(「今年の採用です。」との声。)私の方が先輩だ。しかし、ほとんどの方々は平成3年以前の採用
なので、私の方が後輩です。私は入庁13年数カ月なのですが、風化しないようにという
ことで気を付けています。

さて、横手市役所の話に戻りますが、400人近くいた人間を10年間で300人体制まで持
っていこうとしました。結局、市長を辞めた時は、320~330人ぐらいになっていました。
今の市長がまた頑張ってる今では300人を切っているのです。横手市は当時は人口4万人ぐらい

なので、人口千人当たり職員6.8人ぐらいです。実をいうと、市町村行政というのはその程度でやれるのです。人口千人当たり7人以下でできるのです。恐らく岩手県でも市の行政では人口千人当たり8人から9人ぐらいでやっているでしょう。盛岡市だって分からないけれども、恐らく8人ぐらいにはなっているのではないのかな。人口5千人だとか1万人の町ぐらいだったら14、5人いるのではないですか。

一番気にかかること

市長になった頃から、このままいくとこの国は借金でだめになるのではないのかと思いました。あの当時に国と地方で合わせて200兆円ぐらいの借金だったのです。平成3年頃です。私の記憶で話しているから、間違っているかもしれないけれど200兆円ぐらいだと思う。今は地方と国合わせて774兆円の借金があるということでしょう。平成3年当時は、プライマリーバランスもちゃんととれておったですから。税金なんか余計に入ってきて、地方と国を合わせて90兆円も入ってきた時代なので、バブルは終わっていましたが、まだ余裕があったときです。

さて、やはり今一番気にかかっているのは国の借金です。ズシッときているのは国債依存率が40%以上だということです。プライマリーバランスで16兆円足りないということです。簡単な言い方をすれば、私の給料の4割は借金でもらっています。警察官でも学校の先生でもそうです。これはいつまでもつのかなと、そのことがやっぱり一番気にかかります。市長当時からそういうことを考えておりました。ですから、行革、行革、行革ときています。そういう考え方です。

現在の状況は、4、5年間はそのまま常にもつかもたないかという状況が続くのでしょうか。しかし、どうやったら抜本的な対策ができるかを考えても、まさかデフォルトなんかできるわけないですね。日本は戦後、戦時に軍需産業に対してポンと発行した国債をゼロにせいと、後は払わないよという、いわば踏み倒しをしましたし、この間のロシアでもやっていましたが、それはさすがにやれないでしょう。それではインフレターゲットであるとか、ハイパーインフレ化ができるかという、これもやれるわけがない。日本の戦後には、百万円のお金が1万円の価値もなくなったことがありましたが、今のこれだけグローバル化した社会では、ハイパーインフレになればすぐお金が海外に流れていってしまうでしょう。そうすると財政均衡しかないでしょう。簡単に言うとそういう結論になってしまうのです。財政均衡しか手がないでしょう。それも、国が親ガメで子ガメが県で孫ガメが市町村だとすると、親ガメこければ子ガメまでこけてみんなこけてしまうというわけにはいかないです。そうならないようにとの仕事上のプレッシャーが一番感じています。このことがすべての行政判断の中にある程度入っています。三位一体の改革においても先陣切って何かやろうかと考えるのは、そういうことが常に頭にあるからです。

異文化体験

その他に増田さんとは違った経験をしているのは何かというと、民間時代の35歳から50歳頃まで毎年30日ぐらいずつ海外を अच्छこちち歩いたということですかね。30日ぐらいずつ15年間、異文化を見てきました。南米からアフリカから中近東からみんなほとんどまず歩いて見てきたということで、自分の異文化経験は自分の政治とかものの考え方について相当影響して

いるのではないかなと思います。

ですから、私は若い人には何でもいいから、借金してでもいいから若いうちに、行けるうちに海外に行った方がいいと言っています。これからの日本の社会は国際化対応をしなければならぬからです。日本はこのとおり平和国家だし、戦争放棄も私は間違いなくそれでいいと思う。そういう社会の中で国際化対応するとしたら、やはり1年に50万人ぐらいの人達を、若いうちに、1年間海外に住むぐらいのシステムをつくる必要があります。日本の国には徴兵制度がないのだから。いえ、徴兵制度をやりなさいという意味ではないですよ。そういうことではなくて、日本の国は国際社会の中でどうやって生きていくのかということです。

1人200万円あれば50万人で1兆円です。それはどこの予算を削って作るのか。自衛隊の予算で削るのも何でもいい。1兆円あれば一人200万円です。これを10年も続けてみれば、やっぱり日本人は変わってくると思います。社会観とか価値観がね。今はグローバルな新しい時代の価値観を求められる社会になってきているから、それだけでも変わってくると思いますがね。私はこれからは地方行政も国際化対応の考え方をしていかなければならぬだろうと思うのです。後は、ものを理解するには、ある程度は、イスラム教というのはどんなものかだとか、キリスト教というのはどんなものかだとか、ヒンドゥー教というのはどんなものかという、ひと通りの国際常識は持つ必要があるのではないかなと思います。

夢を奪ってはならない

海外の話を少ししますと、私は湾岸戦争が終わった後、モロッコ周辺に行ったことがあったのですが、あの時に英国のジャーナリストと日本人と、それからモロッコのジャーナリストと話しました。湾岸戦争の時に日本人は何と言われたかという、「あなた方は1兆円の金だけ出して何も汗を流さないから、それではだめだ。」「原油の9割はこちらから行っているのだろう。やっぱり汗を流さなければだめだ。」ということを言われましたね。それから、「あなた方は拝金主義だから、必ずお金でつぶれるよ。」と言われました。「お金で」と。私は「まさか」と。「まさか日本がお金でつぶれるわけない。」と言ったけれども、今まさにお金でつぶれているでしょう。バブルが崩壊して。そうですね。2001年もITバブルまで弾けて、日本の国はどん底でしたね。ともかく、「お金でいかれるよ。」と言われたのは確かです。もう一つ、「テロが起きるよ。」と言われました。アラブ民族は、アメリカが逃げる者に対して攻撃するような行動をとったことについては、「あれは許せないから、必ずテロが起こって、急進派が出てきて、ジハードみたいなことがあるよ。」と、こういう話がありました。その後はニューヨークの貿易センタービルでテロが起こって、アフガニスタンにアメリカが出て行ってしまった。今の社会というのはテロは必ずどこかで起きるものだという想定で安全管理していかなければならないと思いましたね。盛岡だって秋田だって分からない。必ず何かあると。日本の国というのは、そういう安全管理は弱いと思いますね。

さて、去年の6月かな、参議院選挙の頃にトルコに旅行に行ってきたのですが、そのときはトルコの人達と色々な話をして、そういう類の話も聞いたのです。彼らはアメリカのやり方について、「アフガンまではいい。」と言っていました。「これは仕方がないだろう。」と。トルコ人というのはどちらかというと親米的なところがありますから。それまではいいと言います。ところ

が、「今回のイラクについては理解できぬ、あれは侵略だ。」と、こう言うのです。私は政治の話をしているのではないです。問題の根底がどうなのかという話なのです。そのとき「一番許せないのはイスラエルとパレスチナの問題です。」ということでした。今まではイスラエルの人はパレスチナ人に仕事を与えたり農地なんかも耕させたりしていた事実があります。みんなでやっておって、それなりの摩擦はあったけれどもお互いに共存しておりました。ところが、あれだけの自爆テロが起きてしまったら、あとはもう閉鎖してしまって、みんな仕事は与えない、道路を広くして壁をつくって、もう耕すこともできない、全部平らにしなければ見えないからということで、障害物もみんなとったりして、そこまでやってしまったということですね。

それでは、「なぜああいった自爆テロが起きるのだろうか。」と。これはパレスチナ人にすれば、「若い人に夢も希望もない」からです。将来は、自分たちの祖国をつくろうとか、自分たちの生活観を抱こうとか設計をしようと言ったって無理だろうと思ってしまうからです。夢を持たせないと、絶望して自分の命をアッラーに捧げると言ってジハードで、自爆テロに走ってしまう例が多いわけです。急進派だとか言われますが、やっぱり一般の人がやるということはそういうことなのです。日本でも神風で自爆戦争したわけです。あれは若い人達がこの戦争について夢が持てないことがあったのではないですか。

だから私が言いたいことは、やっぱり夢とか希望は絶対に持たせるようにしなければならない。その責任があるのが国家であるし、行政体だと思えます。そういうことを言いたくて回りくどく言いました。誠に申しわけないです。もう少し増田さんだったらうまくしゃべるかも分からないけれどもね。(場内笑)

壊すことから始めよう

さて、市長になって、6年務めて、任期途中で辞めて知事をやらせていただいたのですが、私は相手候補とけんかして県庁に入った知事なものだから、県庁の人方はみんな相手の候補を応援しておりました。だって、秘書課の人達がみんな知事選で私に入れてないと面と向かって言うのだから。(場内笑)

それはそれでいいのですが、そんな感じでもう「あっち向いてホイ」というか、言うことを聞かないのです。役人というのはすごい力持っているよね、やっぱり。「なに、たかだか横手の市長がやってきて何ができるものか。県庁の知事なんかやれるものでない。」なんて、そういう話もしているんですよ。ところがどっこい、あの人達は申し訳ないけれども、財務諸表を見たりバランスシートを見たりは得意じゃない。それから私もいくらかは市長やっているから、揺りかごから墓場までのことは6年間勉強している。前の知事の悪口を言っているのではないですよ。前の知事は前の知事で努力して、その前の知事はその知事で努力したのだけれども、私は政権党から知事になったわけではないので、そのあつれきというのがあったのは確かですね。

言いたいことは、やはり県庁文化というのが育っているのだなあとということです。前の前の知事は24年、それから私の前の知事は18年、結局42年間で秋田県知事はたったの2人。しかも前の知事は副知事から知事になっていました。だから、県庁というのはこういうものかという一つの固定的な概念、システムというものがあつたわけです。私は「形のあるものは壊れる」、「ものごとは形を壊すことから始まる」と思うのです。そうなのです。やっぱり壊さなければものご

とは進まないと思うのです。だから私のやり方は常にそうです。もっと頭のいい人は別なやり方でやるかもしれません。のせたりおだてたりしてやるからね。私の場合は、知事といっても落下傘で一人で降りてくるようなものでしたから。私は知事職はそんなに長くやるべきでないという、多選禁止を訴えていて、3選で辞めるべきだと思っています。増田さんなんか5選でも10選でもやれそうですけどね。私ももう一回当選すればもう4年は務めるでしょうけれども。

4年後に増田さんのところに行って、「おい、知事選でも一回一緒にやらないか。」なんて言うのもいいかもね。増田さんも、「いやいや、一緒にやろうか。」なんていう話で、そのくらいのジョークも言えるし、3県の知事とは仲良くやらせていただいています。青森県の知事さんは最初は少し心配だったんです。あの人は衆議院議員だったから。知事になってみて地方行政の厳しさということ、つまりいかに国がぬるま湯であるかということを知って分かったと、青森県の知事は言っていました。3人は個性も様々で「理性の増田、感性の寺田」（場内笑）とか言われているようですけれど、私は分らないです。それから青森の知事は……あとそれ以上言ってしまったら、青森県の知事に怒られるかもしれないので、青森県に行ってから言います。（場内笑）そういう3人がそろって、いろんなことを考えていって、これから何かもっと建設的に大きくやっていくと、お互いそういう考え方です。

生き残るために何をすべきか

さて、生き残るために何をすべきかという話に戻ります。秋田県庁では、私が平成9年に知事になったので、翌10年度から第1次行革案づくりをやりました。第三セクターから何からバツサバツサやってしまったわけです。その当時4,900人から5,000人ぐらい職員がいる県庁体制を、平成23年度までに3,500人にしようというものです。人口千人当たり3人ぐらいでいいだろうと。秋田県の人口は毎年減って、今は115万人ぐらいですから、3割、28%ぐらい人員削減しよう。5,000人体制から3,500人体制へ。現在4,200人ぐらいの体制です。6年間でここまでしました。実際には平成11年からやっています。県庁の職員もやっぱり戸惑っています。

どんな具合かといいますと、今回、県庁職員に「私が改めるべきこと」についてちょっと書いてくれと頼んだらこういうことが挙がってきました。つまりこれは県庁の職員から言われたことです。読み上げますと、「物事の決断は迅速かつ大胆。ただ県職員がついていけない。予算査定等における事業の選択、判断や事業費の削減、増額等が大胆で、県職員の積み上げ方式の理屈ではかなわない。」その他に「知事部局の職員3,500人体制も当初は戸惑いがあった。」「4年ぐらい前に（方針が）出た時は全然ついて行けなかった。当初は戸惑いがあった。」と、こういうことが書かれています。これ以外も私のダメなところとしては、「トップダウンで現状より数歩先の指示をすることが時々あり、またあまりかみ砕いた説明もしないことから、職員の理解までかなり時間がかかることもある。」と。「もう少しマスコミや職員、県民にかみ砕いた説明をしてもらえると短絡的だという誤解を受けないのではないかという意見もある。」これ私のことです。「議会の根回しは一切せず、率直な議論を行うようになった。」と。「これにより議会と執行部との悪しき貸し借り関係がなくなり、緊張感のある本来の関係になっている。」と。これをいいことだと県庁の職員が書いてきている。皆さんの方ではやっぱり根回ししますか？どうなのですか？何か競

馬場でもめておりましたね。(場内笑) 根回しをやらないからかな。やっぱりな。けれども、根回しをやると貸し借りとかそういう昔からのことが出てくるのです。

そうではなくて、私達は生き残ることを考えようと言っています。国家を相手にした三位一体改革も、結果はあれで限界だったと思います。今の政権では、内向き思考だもの。絶対に権限や予算配分権を手離さないでやろうとしている。恐らくあの人方は相当に限界があると思う。今の体制では無理です。壊さなければ本当の意味の三位一体改革はやれないでしょう。それならばどうするか。後は県庁が生き残ることを考えるしかないでしょう。だから3,500人体制にするという戦略になります。

今、人件費比率は秋田県は全国で後ろから3番目、お金がかからない方で3番目ぐらい、24%ぐらいです。全国平均は31%。岩手県よりも2%か3%かかっていない。その代わりおたくの方は賃金カットを3%しているでしょう。それはうちの方はまだやっていないのです。最後の最後になった時にはいくしかないけれど。(場内笑) まず、私の方は人減らしからやっているということです。だから、ラスパイレス指数が100を大きく割るところも出てくるでしょう。市町村だってそういうところが出てくると思いますよ。80とか。

市町村合併とまちづくり計画

今、秋田では市町村合併に関して、まちづくり計画を立てて下さいとお願いしております。合併する市町村は当然ですが、合併しない市町村にも10年ぐらいの計画を立てて県に出してくださいとお願いしています。これは越権ではないかとの批判もあります。けれども、県と市町村がお互いに理解しなければ、お互いにサポーターになれないから、お互いの信頼関係の上で出してくださいということです。

今のところほとんどのまちづくり計画は、今のシステムで行けば、交付税が3割削られて、国から来るお金が少なくなると見込んでいます。三位一体改革で税源が移譲される点は抜きにしています。そういうことまで考えて、市町村は合併も含めて一生懸命取り組んでいます。私は県内69市町村をみんな回りました。私は合併することによって地域経営を合理化できと思っています。市町村数は21まで減るかなと思いましたが、26か27になる可能性もあります。それから、合併しない市町村に対しては、「住民に対するサービスを低下させずにやっていくには行政コストをこれだけ落とすしかないですよ。」と示すための計画ですよ、と言っています。例えば、ラスパイレス指数が従前100だとすれば、それを80や85にして行政コストを落とし、それで10年間もたせるといような計画の立て方もあると思います。

聖域なき行政改革

私たちの県庁では年間3%の職員が辞めます。若年退職者も入れて3%。間違いない。30年勤めれば3%ぐらい辞めていきます。そして1%補充です。それだけで2%ぐらい削れていきます。10年で2割削れる。やはり仕事はきつくなるという声もあります。そこで後は、「書類を3割捨てる」と言っているのです。書類を3割捨てるとは、ものを止めることだ。捨てなければ新しいことできないのだからと言っています。「捨てることから始まる」のです。形を壊さなければ

ならないし、捨てることから始めて、やっていくしかないでしょうと言っています。

市町村にもそういうことを言っています。だから人口千人当たり県行政で3人、市町村行政で7人、そうすると10人ぐらいでやれるだろうと。今は大体10人プラス4人で14~15人います。3割ぐらいは削れるのではないのでしょうか。後はいろんな面でのコスト削減をしていかなければなりません。いろんな「秋田スペック」とか、そういう考え方を導入しなければならぬだろうというのが基本的な考え方です。

ですから、県によって進んでいる分野が様々あると思います。岩手県は高校再編なんかは私らの方より先にやっているようですが、うちは今、小中学校の統合だとかいろいろやっています。

私はそういういわゆる行政的には育ってきていない。経済ベースで、経営者として育ってきているから、さきほどお話ししたようなことを話して突っ込んでいます。そして、説明責任がいつも不足していると、いつも怒られてばかりいます。説明の能力がないから、いつも怒られながらやっています。でも、怒られる子供だって怒られっ放しの子供というのはそれなりに生きていくものだからね。いや、たたかれっ放しですよ。私はどこの政党を持っているわけでもないですから。知事というのは、政党推薦を受けない方がいいのではと思っています。国の行政だったら完全に政党政治でやらなければならぬでしょうけれども、県行政というのは政党政治ではないので、私としては政党政治はある面では否定してものを進めた方が県行政としてはいいのではないのかと、私はそう思います。増田知事さんは増田知事さんの考え方でやっていくのでしょうかね。

始めることを忘れるな

後は始めることです。始めることを忘れた人というのは、これは何ともならない。なんぼ年をとっても始めることを忘れない人はいつまでも若いというか、ピンピンしています。20代だって何も始めることができなければ、これは何ともならない。特に行政は始めないのです。それから、現場に行かないのです。行政の弱点は、新たなことを始めようとしなないということ。何かを始めようとするものすごく抵抗がある。だって、今までどおりやった方が楽なものね。けれども、時代は常に新しい価値を求めていて、新しい価値観でもものが動いていることを認識すべきです。

今回は行政改革を主にして、「形のあるものは必ず壊れる。その後にもものを進めていかなければならぬ」ということでしゃべっています。私の目標としては、日本一スリムで効率的な行政を目指そうとしています。そういう行政をやりたいということで知事をやらせていただいています。具体的には、八つの地域振興局を三つにして、平成23年度に3,500人体制達成です。つまり、市町村が合併で20とちょっとになってしまうので、そうなってくると県庁、特に地域振興局は八つも必要ではないのです。そうすると、本庁が1,500人で三つの地域振興局は各700人ぐらいでやっていけるだろうとなりますね。そういう形になるだろうと考えています。

教育については、県内に教員は1万1,000人いるのですが、これから10年間で子供さんは減少するから、1,700人ぐらいは採用減になってしまう可能性が強いです。義務教育の小中学校は450校ぐらいありますが、350校ぐらいに統合してしまえばどうかと思っています。校長先生も教頭先生も学校には必ずつくことになっているし、これも含めてスタッフが1校当たり5~6人いるとすれば、5~6百人は節約できて、現場に教師を300人ぐらい増やせるのでは

ないかと思います。秋田県は30人学級なんかは山形県よりもずっと先にやらせていただいて、ただし30人学級とは言わないのです。文部省に気を使って30人「程度」学級と言っているのです。今から5年も前に、チームティーチングとか30人程度学級をやろうとなりました。どうして「程度」かという、文部省に叱られるからと、こう言うわけです。そうでしょう。教育関係者の人方は分かるでしょう。認められていなかったのだから。

三位一体改革の必要性

日本の国がどこまでやれるか分からないけれども、三位一体改革をしっかりとやらなければ生き残れないでしょう。この日本の国は。地方のもっと身近なところで予算も決めて執行も考えた方がよい。今はラーメンをつくるにも、カツ丼をつくるにも、焼きそばをつくるにも、何をつくるにも、みんなレシピ、メニューは日本丸食堂、つまり国家が決めているのですから。それを3割出さない、2割出さないとか、買っていきなさい、要らないものまで食堂から持っていけど、こう言うでしょう。(直轄事業)負担金のことです。ラーメンつくるのだったら、地方でラーメンつくって、豚骨でつくろうが、かつおぶしでつくろうが、宮古の何かの魚のだしでつくろうが、それはそこの地元任せたらいいでしょう。基準値だけは考えておいてもらえばいいし、重複することもなくなる。だから、秋田県は今、市町村合併のタイミングに合わせて70程度の権限を市町村に権限移譲しています。農地転用の権限まで移譲しています。幼稚園、保育園の認可を含め、すべてのものをまずやろうよと。中核市並みに権限を市町村に持たせてしまおうというのです。そういうふうにしてやって、そして市町村が自立できるようにサポートしよう。そういう形で進めさせていただいています。

私はこれからの県と市町村はそういう関係でどんどんいくと思うのです。後は国がどうするか。壊れるまで待つしかないなと思っています。積極的ではない表現になるけれども、壊れるまで待つと。けれども、市町村行政、県行政が変われば国も変わらざるを得ないでしょう。だから、増田さんともさっき話したけれども、去年はこれで限界だなと。あれだけ増田さんや梶原さんとか、私も相当言ったのだけれども、頑張ってみても、結果としてはこれが限界だなと。県の職員の中には、やっぱり国から補助金来なくなればやっていけないのではないかと言う人もいます。けれども、そもそもお金はないのです。補助金だって何だって。国でももう地方に送れないのです。結局、5年、10年後の将来はなくなってしまうお金なのです。国は出せないのです。そうでしょう。それならば、もっと身近なところで、岩手県は岩手県の中で自分たちのメニューをつくっていくことが大事だと。それならば生き残れる可能性もあるでしょう。そうすれば2割でも3割でもコストも下げることができましょうし、自分たちで工夫して岩手型の県行政が可能になります。そのうち北東北3県になるか東北6県になるのか分かりませんが、県レベルの合併が始まってくるでしょう。恐らく。間違いなくその時代が来ると思います。市町村が合併して自立していくと、もっと広域行政が必要になると思います。私はそう信じています。大きくなればスケールメリットも発揮できます。

岩手県と秋田県。どこが違う？

さて、秋田県庁の職員も5人ぐらい皆さんにお世話になっているし、青森県からうちの方にも来ているし、岩手からも来ている。そうそう、岩手県の人と秋田県の違いというのは何かを聞いてきました。怒らないでね、この人達が帰ってきたとき。秋田県が優れていると思う点。あるらしいのです。「内部管理担当課、つまり人事課、財政課、総務課と他の課との間のパワーバランスがちょうどよい。」と。「岩手県庁は人事課、財政課の影響力が他の課に比べていまだ圧倒的に強い。年度末や年度初めは依然として決裁をもらうために財政課に行列ができています。」と。

(場内笑) 2点目。「たしか上級職だけと伺いましたが、事務系職員は必ず土木の用地や税の徴収、福祉のケースワーカーといった、いわゆる県職員の3K職場のいずれかに一度は配属され、直接県民を相手にする業務に従事する機会がある。」と。「基本的に国と市町村の『中2階』業務が大半の県職員にとって現場を知るにはよい機会になっている。」と。後は、「昼に班のメンバーと一緒に食べに行くのがいい。」とか。それから、「岩手県は地方振興局への権限移譲がだいぶ進んでいる。」と。「ここは岩手県の方が優れていると思う。」ということです。さらに、「県庁と振興局の役割分担がはっきりしている。」と。「秋田県の場合は局長に権限を移譲している事務でも、要綱の運用上の問題で、担当者が県庁にしばしば回答を求めて来る。」と。これ以上言ってしまうとその人本人が確定できるからこの辺で止めようかと思いますが・・・。

日常生活で気づいた点として、「来てみるまで全く秋田を知らないことに気づきました。」と。「基本的に東北自動車道や東北新幹線で仙台や東京とつながっているという気持ちが強く、視線がどうしても南へ向きがちでした。」と。やっぱり岩手県の方はそんな感じかもしれないね。それから、「秋田県は老若男女全般に車の運転が乱暴。黄信号と赤信号の意味を取り違えていると思うほど信号を守らない。」と。(場内大笑)「特定の年代に偏っていないので、そもそも車に乗ると強気になる気質なのかとったりしました。」秋田県に来たらそれに気をつけてください。(場内笑)そういうことです。それから、「岩手県は勤務時間をきちんと守る。」と。「出勤時間8時半、昼食時間12時から13時、原則的に守られている。プラス・マイナス10分ぐらい多目に見る秋田よりも時間にシビアだ。」と。(場内笑)だから、おたくの方がしゃきっとしているということですね。

「官民共生」でネットワークを

さて、これからの行政というのはどうあるべきか。先ほども言いましたとおり、行き着いたところは、「県はサポーター」ということです。それで私は今年から、もっと県民に力を与えようと考えて、「官民共生」という言葉で表しています。官と民との共生だと。

産業振興の面でもそうです。おたくの方でもワンストップでやっていらっしゃるでしょうが、民に対しても元気が出るように、能力のある人の創業支援なり人材育成なり、それからマーケティングまでワンストップで行う支援組織をつくるつもりです。そういうものも含めて官と民との共生でネットワークをつくらうということです。

元気な秋田県をつくらうというのが今年の目標です。すべての面でできるだけネットワークをつくって、官と民の共生をして、その地域が元気になるように、市町村も元気になるようにやろうということです。そういうことが教育についても同様で、批判があろうとも、力の強い学校をつくって教育しようと、人材育成しようと思っています。教育、環境、健康がこれから大切な

で、そういうものを含めて官民一体的なネットワークをつくるのがこれから大事だと考えています。

来るべき所得格差社会に向けて

それと、もう一つはこういうことです。今、企業はみんな身軽経営になっていますね。グローバルな社会の中で、ITバブル後はみんな身軽で、雇用もしない、設備投資もしない、そういう時代になっています。だから、非常に所得格差が出ています。こんなに出てくるとは思わなかった。3割がフリーターだとか派遣社員だとか、長期雇用されていない人達です。そういう時代になってきています。県庁の職員の所得が100だとすると、その人達は30とか40です。こんなに差がついている。これは社会現象として認めざるを得ないです。今の社会システム、経済システムがそうなっている。そうなってくると、低所得者に対するいろんなセーフティーネットをつくらなければならぬと思います。

秋田県では、例えば少し政策的に古いと言われますが、公営住宅の必要性を感じています。今でも県営住宅を建てますと、月間所得20万円以下という条件だと10倍の応募がすぐ来てしまうのです。それだけ所得格差が出てきている。今は介護も、全国で400万人、秋田県には5万人の対象者がいる。6兆円産業だなんて言っていますね。低所得者も含めた弱者の方々を支援する社会、介護を含めた社会が、新たな形で出てくる。例えば年金の問題だって私は市長の時代から年金は全部一元化すべきだとか、医療保険は、厚生だとか役所の共済でやる医療保険ではなくて、国保とみんな一元化すべきだとか言ってきました。役所だってそういうキャパシティーは持たなければならない時代になってきている。

例えばここから東京まで新幹線は1万5,000円ぐらいかかりますよね。でも実は秋田からの方が割安なのです。飛行機との競争があるから。こまちで東京まで秋田駅出発は1万円1千円で行ける切符があります。その代わり1時間半は余計に乗らなければならないけれどね。増田知事によく言っているのですが、5,000円ぐらいで東京に行ける交通手段だとか、低所得者でもやっていける公共的な社会システムが必要です。これからはインフレは進まない。10年間でほとんどモノの値段は上がっていないでしょう。所得は下がっているし、工業出荷額も落ちてきているところがあるし、農業生産額も落ちてきている。それは粗生産額、つまり金額で考えればの話です。価値の問題ではなく。そういう問題が出てきているので対応をしていかなければならぬと思います。

そういう新たな時代が来て、新たな価値が求められる社会になってきているので、行政は、県民に対するサポーターとしてどの程度までやれるか、市町村行政に対してどの程度のサポーターになれるかという、これが最後の行政の価値観になってくるのではないかなと、私はそういうふうに思っています。

国際教養大学の挑戦・県立大学の未来

最後は、宣伝をさせていただきます。5年もかかって秋田県に国際教養大学という大学をつくりました。議会から反対されました。特に古い考え方を持っている、「世の中の大学というものは

こうでなければならない」と思っている人方からは反対されました。4年ぐらい本当に苦労しましたが、その代わりこの学校は日本の国でオンリーワンです。今、偏差値71とか言っているのですけれども、人気急上昇中です。大学の先生方は3年間の任期任用制。教授陣は外国人が6割。学生は半年でTOEFLで500点、今では550点とらないといけない。1年半でみんな海外への留学を義務づけています。550点になったら海外に留学させます。そして帰ってきて、英語でビジネスできるようになってもらう。今は150人ぐらいいるけれども、将来は200人ぐらいの規模にして、そして職業大学院をつくろうということをやっています。

経営の方法を含め、今までの大学のシステムを全く変えました。全国で地方大学の地方独立行政法人化の第1号なのです。これからの時代は何をやると言っても、人材育成とオンリーワンの時代ではないかなと。小さくてもオンリーワンで。ナンバーワンは要らないけれども、オンリーワンという……オンリーユーでもいいかもわからないけれどもね。(場内笑)けれどもそういう社会になったということです。

今、県立大学も平成18年に独立行政法人化で全く新しい大学にしてみようということを進めさせていただいています。これはアグリビジネスで行こうと考えています。秋田県には大潟村に百町歩ぐらいの田んぼがあるのだから、そこにアグリビジネスを身につけるために入って行って、コメづくりから、畜産から、野菜づくりから、花卉まで、実際に4年間つくって学んでもらって、専門職を育てようというアイデアです。これからの大学というのは、もっと現場に密着したやり方が大事になってくるのではないかと、社会に貢献するのは純粋な研究学問ばかりではないという社会になってきたのかなと、そんなことを思います。

おわりに

いずれにしろ、1時間も訳の分からない話をさせていただきました。(場内笑)「生き残るために何をなすべきか」ということをお話するつもりでしたが、何をしゃべったのかわからなくなってしまいました。(場内笑)「捨てることから始めよう。形のあるものは必ず壊れるのだから。」ということも、これも何かしゃべったのだけれども、何かしゃべったつもりです。

結論としては、「行動してください」ということ。「始めることを忘れないでください」ということを付け加えさせていただきます。将来は何とか一緒になる可能性がありますので、ひとつ面倒を見てください。よろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

質 疑 応 答

○司会

ありがとうございました。

質問の時間をちょっととらせていただきたいと思います。皆さんの方から、せっかくの機会でございますので、ご質問あれば挙手をお願いしたいと思います。

○質問者

貴重なお話をいただきましてありがとうございます。大変参考になるお話だったと思います。ただ、せっかくの機会でございますので、岩手に対する評価というか、これから将来一緒になるという大変ありがたいお話もいただきましたけれども、そのパートナーとしての立場から、岩手に対する評価、こういう点はいいのもっと伸ばすようにとか、あるいはこういう点をもっと改めたらいいのではないかというお話を、きょうは知事がおりませんので、歯に衣着せぬご注文などいただければと思うのでございますが、よろしく願いいたします。

○寺田秋田県知事

秋田県はどちらかというとな楽天的なといいますか、どちらかという后感性で動く面も強いと思います。だから、何か落ち込んでしまったりしてボンと自殺までいってしまうのかもしれない。どちらかというとな人生を楽しんでかつ落ち込む方が秋田県人で、あまり努力をしないのが秋田県人の気質なのかなと思っています。そういうのも人間的な魅力であることは事実ですが。岩手県は「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」という宮沢賢治さんのような理性的にじっくり我慢して努力するというタイプだと思う。だから、お互いに血が混じればちょうどいいのではないですか。岩手の場合は、新幹線があるし、それから盛岡は県の真ん中だから、という影響もあります。宮古あたりに盛岡市があるとすればまた違った県土になったと思います。秋田の場合は端っこでしょう。秋田市はあっちの日本海の端っこにいるでしょう。だから、意外とまわりの社会の影響を受けないで、秋田市が意外と温存されて、風に吹かれていない。ここは真ん中だから、あちこちから、仙台からも相当強い影響も受けるでしょうし、そういう点では新幹線効果というのは、岩手が経済的に自立するための一つの要因にもなったのではないのかなと思う。そういうことで、引っ張られていったこともあるでしょう。それから岩手県はやっぱりいい文化を持っているけれど、私の方から見ていると、もう少し強くトライしてみたらいかがかなと思うときもあります。

よろしいですか。答えにならない答えで。だけれども、難しい質問だもの。確かに秋田県より忍耐強くて、我慢しながらやるという性格は秋田県よりはあると思います。秋田県は米だとか何かでやっぱり豊かな県だったからね。今はだめなのですけれども。世代が変わってくればまた変わってくると思います。

○司会

よろしいでしょうか。

ほかにございませんでしょうか。せっかくの機会ですから。

はい、どうぞ。

○質問者

お話ありがとうございました。

市町村合併だとか道州制だとか、形が大きくどんどんなっていくような話がある中で、やはり小さなコミュニティーだとか集落だとか、そういったものがしっかりして初めて大きなところも機能するのではないかと思うのですが、これから人口減少だとかさまざま社会的な問題が出てくると思うのですが、先日たまたま白神の実写映画を見させていただいたのですけれども、地域の

宝を大事にして頑張っていこうというような、そういう姿というのも秋田の方で強く出ているのかなというような印象も持っておるのですが、その小さな部分での知事さんのフォローなり考え方なり、そのスタンスをお聞かせいただければと思います。よろしくをお願いします。

○寺田秋田県知事

ちょっと済みません。アイデンティティーというか、地域の文化ということですね。ところで、あなた結婚したことありますか。していますか。奥さんは結婚する前と結婚してからとではどうでしたか。ああ、かあちゃんもこういうところがあったのだな、なんて思っていないですか。

○質問者

そういうところあります。

○寺田秋田県知事

「市町村合併をすると地域の文化がなくなる。」とか、「アイデンティティーがなくなる。」という声があります。しかし「一緒になればなるほどその文化というのは残されて、違いが分かる。」、「初めて自分の地域の良さとか欠点が分かってくる。」という声もあります。私もそう思います。後はコミュニティとか集落の問題については、これからはインターネットを含めたネットワークの時代なので、若い人方がどうやって作っていくか。お年寄りの、ある程度年配になった方々はそれなりのネットワークは持っているはずですが、これからますます過疎化して農村集落人口なんかは都市部に集まってくるでしょう。これは止めようがないと思います。しかし、それを残るように規制する必要もないと考えています。もっと自由にサポートをした方が、個々人が個性ある生き方ができる社会になるのではないですか。

今までは一律、均一、標準的が重んじられて、みんな周りに合わせていたけれども、これからは新しい価値観、新しい人生、新しい人間像が求められる、そういう時代になってくると思います。いろんな形の特徴を持った人間像が認められる社会になるのではないですか。個性の時代というのは、簡単に言うとそういうことだと思います。だから、市町村合併によってその地域の文化がなくなるということはありません。なくなったと感じるのは、もともとそこにその価値がなかったからという可能性もあるかもしれません。しかし、ほとんどは、合併することによって自分たちがその特徴を再発見する、そういう社会だと思います。私はそう思っていますし、実際そのようですよ。

○司会

ほかにございませんでしょうか。 よろしいでしょうか。はい。

○質問者

今までのご質問ともちょっと関連するのですが、秋田県さんにおかれましてはかなり市町村合併を積極的に進められているようなのですが、やはりこの東北各県共通の課題として、人口減少の中で、県庁所在地への一極集中という問題があるかと思うのですが、秋田県の場合は秋田市も先日合併なされたようですが、そこあたり一極集中ということに関して知事さんは

どのような対策といたしますか、どのようにお考えでおられるのでしょうか。

○寺田秋田県知事

東京の一極集中については、私は絶対に弊害があると思うけれども、人口30万人、40万人では一極集中というほどではなくて、いい意味で考えたらいかがですか。私はそう思います。あと例えばこちらでは、一関さんがどうなるかだとか、あちらの海岸の宮古さんがどうなるかとか、北上市はもっと成長するのとかといろいろあるでしょうけれどもね。今までは4万人の市でも、合併して10万人になると10万人のパワーが出てきますから。だから、そういう点ではあまり問題として取り上げないで、前向きにとらえたらいかがでしょうか。盛岡は盛岡で一極集中して都市機能を県民全体のためにもっと高度に上げるとか、一関は一関でもっとどうにかするためには、例えば平泉をもっとどうにかするかと、連携するとかという、そういう話になってくるのではないですか。私はそう思いますけれども。

それから、市町村合併をするしないではなくて、どういうまちづくりができるかということが大きな課題だと思います。しかし、今年の3月31日までに合併申請するところは合併特例法の特典があるから、私は合併するのだったら早目にそれを活用した方がいいだろうと。もっとも今後、国がどこまで特典を手当てしてくれるか心配なところはありますよ。よく0.8を掛けたり0.9を掛けたりしてくるでしょう。そうなのだよ、今は。だけれども、やれることはやろうということなのです。よろしいですか。

○司会

そのほか、あとお一人方ぐらい、もしいらっしゃれば。ございませんですか。 はい、どうぞ。

○質問者

貴重な話ありがとうございました。

先ほどお話の中で、いろんな行政のスリム化をやっていかなければならない、これは我々も向かっているわけですが、ただそれ非常に痛みが伴います。非常にきょう知事さんからのお話の中でそれは大事だと思ったのは、やはり県民に夢を持たせることが大事だと思っているのですけれども、知事さん先ほどこれから3県連携とかと話があったときに、3県としてどういう県民に夢を持たせるかということのもしイメージをお持ちであれば、教えていただきたいのですけれども。

○寺田秋田県知事

3県が一緒になれば400万人を超えます。そして、人口が400万人で国土の10%ぐらいの広さを持つとなると、可能性というか、研究機関から何から含めて、すごくスケールメリットが出てくると思います。だから、3県が独立するぐらいの考え方でものをやって、自分たちのアイデンティティーというか、その生き方をつくる必要があるのか。それが結局は夢にもなる。

秋田も盛岡も同じところだということはないです。岩手県の人達は、秋田県の、日本海の海岸によく遊びに来ます。浜辺はもう岩手県の人達の車でいっぱいです。ゴミも落としていきますけ

れども。(場内笑) 私達は三陸のリアス式海岸とか見に行きますし、三陸で1週間でも休めるとなれば、新しい文化だしね。交流が広がるということですよね。それから病院関係でも研究機関でも大学でも、いろんな面で、スケールメリットがあって、新たなエネルギーが出てくるだろうと思います。だから、そういう点ではすばらしいし、環境も含めていいことだと思います。私はそう思います。

それから、これから3県がもっと伸びるには、やっぱり女性の能力をもっと活用できる社会にしなければならぬでしょうね。男女共同参画というのは、男性の能力ももちろんだけれども、女性の能力をしっかり活用できる社会システムをつくらなければ、21世紀の日本の社会は発展しないでしょう。だから、うちの県は人事課長を女性にしました。人事課長というのは偉いのです。

(場内笑) 皆さんの課長職のポストはみんな決めてきますから。部長職のポストだって原案上げてきますから、うちの県は。人事課長については何代か女性の課長を、2代ぐらい続ければ良いかなと思います。2代ぐらいかな。少なくとも女性の登用のシステムだけは作っていけと言っています。今は採用試験をすれば、4割から5割近くは女性がいるのではないの。どうもそのような世の中になった。やっぱり女性の能力は県庁も活用しなければね。この会場はみんなほとんど男性ばかりなのだけれども、うちの県もそうです。しかし、そうしなければならぬ時代になってきました。やっぱりセンスが違いますから、考え方が。それがきっちり登用できる社会システムが必要になってくるのではないですか。夢はやっぱり3県が一緒になった分だけ大きな夢を抱けると思います。そういうことです。

○司会

それでは、この辺で終わらせて……

○寺田秋田県知事

では、どうも長時間ありがとうございました。皆様のご発展祈ります、どうも。合併したときはよろしく願います、どうも。

○司会

きょうは本当に長時間示唆に富むお話をいただきましてありがとうございました。

改めまして寺田知事さんにもう一度感謝の拍手をしたいと思います。どうも。